

輸出が国内価格に波及

青森リンゴの収穫量や出荷量は「年産」で表示される。これは統計を青森リンゴのサイクルに合わせるためである。8月に超極早生が出回るもの一般的な取引では、市場に出回るリンゴは9月の

法)されたものが8月まで出荷される。収穫年の9月から翌年の8月までが「年産」(リンゴイヤ

13

5万トン時代へ

青森リンゴ輸出

早生リンゴから始まる。

し)となる。

その後は、10月の中生種、11月の晩生種まで収穫され、普通冷蔵されたものが翌年の3月ごろまで、更にCA貯蔵(酸素濃度を少なくしてリンゴの呼吸を抑える貯蔵方

リンゴの価格形成は、前年産の有袋ふじが例年最高値を出荷最終月の8月に記録し、新しい年の早生リンゴに引き継がれる。平年作で品質が良いと価格が順調に推移する

相場形成

のだが、豊作だと往々にして暴落を引き起こす。大暴落を引き起こした2001年産、02年産、08年産は49万ト前後の生産量があった。

大きな変化をもたらしている。従来の輸出は、中華圏の旧正月(旧暦の正月で、年によって1月下旬から2月中旬)が中心だった。しかし、年内か

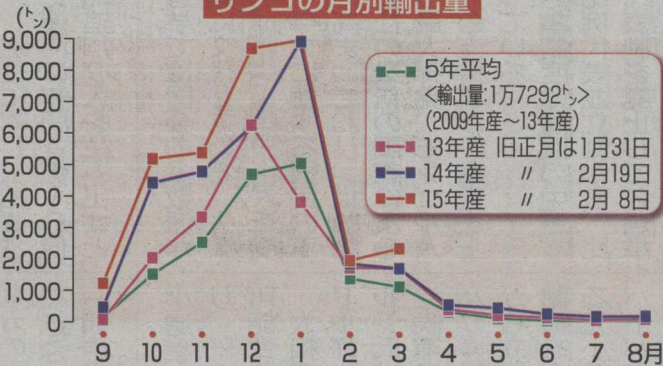
従来、年産の出だしの早生リンゴの時期には競合果実が多くあり、価格はそこそこだが、ナシや柿などと競合する中生種にかけて値を下げ、12月以降の晩生種で盛り返すというパターンで価格が推移している。

しかし、ここに来て、最近の輸出が相場形成に

このまま、リンゴの相場は、東京や大阪など大都市市場で決まっていた。しかし、輸出が国内流通の1割にも達し、早い

ないか。時期から弘前の産地市場(県りんご輸出協会事務局長 深澤守)

リンゴの月別輸出量



財務省貿易統計を基に作成

から、産地の取引の状況が国内価格へも波及する建値(取引価格の基準)形成ができています。輸出によって産地の力で国内の消費地価格まで決めることができるといって、国内産青果物でなかなかない理想形が誕生しつつあるのでは